

シャンの在家仏教徒朗誦の特徴
 —— タイ国内の仏教文書朗誦との比較より ——

Feature of Shan Lay Buddhist Recitation
 —— Comparison with the Recitation of Buddhist Manuscripts in Thailand ——

村上 忠 良*
 MURAKAMI Tadayoshi

This paper aims to consider the feature of the lay Buddhist recitation among Shan Buddhists in Northern Thailand and Southern Shan State. In order to analyze the recitation of Shan Buddhist manuscripts (*lik long*), the author compared it with the recitation of *klon suat* in Central Thailand. *Lik long* is the name of a category of Buddhist manuscripts written in Shan. Its contents are commentaries on Buddhist teachings and instructive stories, and its text is elaborately metrified. *Lik long* is the manuscript to be recited for lay audiences by lay reciters. Many researchers refer to the traditions of manuscript-recitation among Thai Buddhists. The recitation of Vessantara Jataka and Phra Malai Klon Suat is well known in the Thai Buddhist tradition. *Klon suat* is a style of text for recitation written in Thai verses. In most Thai Buddhist religious practices, monks recite them before lay audiences. However, examining researches on Thai literary history and the ethnographies of Thai Buddhist practices in Thailand, the author found evidences about the traditions of *klon suat* recitation by lay Buddhists in Thailand. While monks mainly take the role of reciter of *klon suat*, some lay Buddhists also recite them. Through the comparison of two types of the recitation of Buddhist manuscripts written in the vernacular — *lik long* and *klon suat* — the author shows the similarities and differences between them.

1. はじめに¹

本稿の目的は、東南アジア大陸部のシャン州を中心に居住する民族であるシャンの仏教文書の朗誦に関わる文化の特徴について、タイ国で行われてきた仏教文学研究や仏教実践の民族誌記述との比較から検討を行う。本稿では、経典・註釈文献・仏教説話など仏教に関わる文書全体を総称して「仏教文書」と呼ぶ²。

東南アジアの上座仏教徒社会では、パーリ語の

三蔵経典や註釈文献に加えて、東南アジア地域内で著作されたパーリ語文書、ローカルな民族語・地域語によって書かれた仏教説話などの仏教に関わる文書を継承してきた。これらの仏教文書の中には、仏教儀礼やその他の特別な機会に、僧侶や宗教職能者によって朗誦されるものも数多くある。在家信徒にとって、このような仏教文書の朗誦を拝聴することは積徳となると考えられている。また、仏教儀礼の中で、仏教文書を供物として寺院に供えることも積徳の行為であるとされ

*大阪大学言語文化研究科

る。供物としての仏教文書は、文字知識に長けた者が、既に存在する文書を筆写し、作成した。このように仏教文書は、仏教儀礼を背景として朗誦と筆写によって継承されてきたのである。さらに朗誦以外にも、仏教文書に書かれた文字は宗教的な力の源泉と見なされ、パーリ語誦句の文字やそれらの文字を組み込んだ図像は、施術師による護符や刺青の図版としても使用される。

このような仏教文書に関わる朗誦や文字・図像の使用は、文書に書かれたテキストの内容とともに、文書の存在意義を構成している。ベルクヴィッツらは、従来の文献学中心の仏教文書の研究に対して、仏教文書の崇拜、奉納、朗誦、書写、保存、文字知識の継承と口頭での上演といった宗教実践を「仏教文書文化」(Buddhist manuscript culture)と呼び、新しい仏教文書研究の方向性を提示している [Berkwitz et. al. 2009]。

本稿では、シャンの仏教文書文化の特徴を検討するため、シャン語で書かれた仏教説話の文書を研究対象として取り上げる。その理由は、シャンの人々の仏教実践の中で、仏教説話の文書の朗誦が欠かすことのできない重要な要素となっているからである [Murakami 2009, 2012; 村上2012]。ローカルな民族語や地域語で書かれた仏教説話は、しばしば「仏教文学」というカテゴリーのもとで、文学(史)研究の分析対象とされてきた。しかし、文学(史)研究は、主としてテキストを分析の対象としているため、文書の社会的受容や文書に関わる文化的な実践は研究の背景として説明されるか、あるいは省略されることが多い。特に、声に出して読み上げられるという「本来の読み方」について、十分な検討がこれまでなされてこなかった。仏教文書は、特定の作家(著者)が作成した

テキストを読者個人が黙読を通して受容し鑑賞するという近代文学の作品とは異なり、「朗誦する・拝聴する」「筆写する・供える」という行為を通じて社会に受容され、継承されてきたのである。このような受容・継承の形態は、仏教説話の文書のみならず、他の仏教文書の文化的・社会的実践にも多く共通する点がある。

本稿では、シャンの仏教文書の朗誦・拝聴という声を媒介としたテキストの享受(共有)の形態に注目し、タイ仏教における仏教文書朗誦との比較から、その特徴の検討を試みる。

2. シャンとその仏教文書文化

2. 1 仏教徒としてのシャン

シャン(Shan)はタイ系民族(Tai)の1グループで、その多くは南伝上座仏教系の仏教徒である。主たる居住地はミャンマー連邦共和国東北部のシャン州であり、その一部はシャン州と接しているタイ国北部や中国雲南省徳宏地区などの国境地域にも居住している。上座仏教受容の歴史については不明な点が多いが、現在シャンの人々の間でみられる仏教の伝統は、15～16世紀ごろに現在のタイ北部にあたるラーンナーと上ビルマからこの地域にもたらされたと考えられる。チェントウンを中心とするシャン州東部は15世紀ごろにラーンナーから仏教を受容したが³、上ビルマに隣接するシャン州南部や北部では、タウングー朝のバインナウン王(在位1551-1581年)の時代に仏教の布教が推進され、ビルマ系の仏教が広く受容されていったとされる⁴。このような近隣地域との経緯から、シャン州東部ではラーンナー仏教の影響が強く、パーリ語経典はラーンナー仏教の経典

文字であるタム文字で書かれたものを使用している。一方、シャン州南部、北部では、ビルマ仏教の影響を強く受けており、パーリ語経典はビルマ文字表記されたものを使用する。本稿で紹介するシャンの事例は、主としてシャン州南部からタイ国北西部にかけてのものであり、ビルマ仏教の影響を受けた後者の地域に入る。

2. 2 シャンの仏教文書文化

シャン語で仏教の説話や教説が記された文書をリーク・ロンと呼ぶ⁵。リークは「文字・書物」、ロンは「大きい」という意味の語で、仏教の教えに関わる内容が書かれた「偉大なる書物」として尊崇される。主として仏教儀礼の場で朗読されるものであり、その内容は仏伝、仏教説話、教義の解説などである。これらの仏教文書は世俗的な内容の書物とは明確に区別されている⁶。ターウェルとチャイチューンがドイツの図書館に所蔵されているシャン文書の文献調査を行っており [Terwiel and Chaichuen 2003]、その目録 (全335件) からシャン文書の内容を分類してみると次表のようになる (表1参照)。

この中で、リーク・ロンにあたるのは「仏教文書」(108件)である。このほかに仏教に関わるものでは、施術者が刺青・護符作成やト占・星占いの施術の際に参照する「施術護符用ノート」(135件)があるが、朗読用のテキストではないためリーク・ロンには入らない。また「護符」はパーリ語句の文字や図像が書かれた紙片・布・服であり、これらもリーク・ロンとはみなされない。ドイツの図書館所蔵の文書がシャンの人々の文書所蔵状況をそのまま反映しているとは言えないが、「書かれたもの」の中では、「仏教文書」は「施術

護符用ノート」と並んで大きな部分を占めていることが分かる⁷。

テキストとしてのリーク・ロンの特徴は2点が挙げられる。第1点目はシャン語・シャン文字で書かれていることである。パーリ語が主として僧侶や施術者によって使用される上座仏教の経典語であるのに対して、リーク・ロンはシャン自身の言語で書かれており、テキストの内容がシャンの人々によって広く理解されることを前提としている。但し、ビルマ文字で表記されたパーリ語の語句やビルマ語からの借用語が多数含まれているため、テキストを理解するためにはパーリ語やビルマ語の仏教知識が必要となる。第2点目は韻文で書かれていることである。リーク・ロンのテキストは仏教儀礼などで朗読され、多くの在家信徒がそれを拝聴するという形で享受される。朗読する者はこの韻文の仕組みを理解し、特定の調子にのせて美しく朗読しなければならない。つまり、リーク・ロンは文字テキストであるが、朗読された音声として人々に享受される。このように声を

表1 ドイツの図書館に所蔵されているシャン文書

	種類	件数	
1	仏教文書	108	
2	施術護符用ノート	135	
3	護符	紙片	52
		布	16
		天井布	7
		服	6
4	文字学習書	3	
5	行政文書	1	
6	縁起	1	
7	その他	6	
	計	335	

Terwiel and Chaichuen (2003) より村上が作成

通したテキストの享受という形態は、タイ系民族の言語で書かれた仏教文書に広く共通する点である。この点については、次節について検討する。

リーク・ロンは、葬送儀礼、死者供養、出家式、家の攘災儀礼などの仏教儀礼の際に、既にある写本から書写されて寺院に奉納される。積徳行の一つとして經典や仏教文書を寺院に供える慣習は、シャンのみならず他のタイ系の仏教徒の間に広くみられる [cf. Manas 1995]⁸。寺院は供えられたリーク・ロンを多数収蔵しており、また寺院以外にも在家信者が自宅にリーク・ロンを数冊所有していることも珍しくはない。リーク・ロンが供物として供えられる儀礼ではリーク・ロンの朗誦が行われ、儀礼の参列者がそれを拝聴する。リーク・ロンの朗誦を拝聴すると、僧侶の誦経や説法を拝聴するのと同様に功德を得られるとされており、在家信者にとって仏教の教えに接する身近な媒体となっている。リーク・ロンはそれを寺院に供物として寄進することによっても、またその朗誦を拝聴することによっても、功德を積むことができる「聖なる書物」なのである [Murakami 2009]。

リーク・ロン奉納のための写本の書写や儀礼時の朗誦を行うのは、文字知識を有する在家者で、シャン語で「チャレー」と呼ばれる⁹。チャレーは、朗誦の際にいくばくかの報酬を得るが、それだけで生計を立てるのは難しく、「職業」というよりも、仏教文書の朗誦者・筆写者の「役割」を表す¹⁰。チャレーのほとんどは男性で、基本的なシャン文字の学習は見習い僧の一時出家時に始めているが、リーク・ロンの朗唱や書写には仏教教義、パーリ語、ビルマ語等の文字知識に精通している必要があり、また韻文のテキストを韻律に従って正しく朗誦する技能を身につける必要とな

る。そのため、チャレーとなるには、通常の男性が学ぶ基本的な文字の読み書き能力のレベルを超えて、更なる学習が必要となる。在家信者の中でも特に高度な文字知識、朗誦能力、仏教教理の知識を有するチャレーは、教学に長けた僧侶と並びシャンの仏教文書文化の中心的な担い手である。

標準的な長さのリーク・ロンは一つの話を含めて続けて朗誦すると5～6時間かかる。そのためタイ国北部の仏教儀礼における朗誦では、複数名のチャレーが交代でリーク・ロンの一部を1～2時間ほど朗誦することが多い¹¹。1995年10月から1996年9月まで筆者が行なった12ヵ月間の調査期間中、リーク・ロンの朗誦を伴う仏教儀礼に17回参加した。その内訳は葬儀12回、出家式2回、寺院での死者供養2回、家の攘災儀礼1回であった。家の攘災儀礼の場合のように、寺院ではなく在家信者の家でも朗誦されることもある。リーク・ロンの朗誦の聴衆は、主として仏教儀礼の参加者や持戒日に八戒を受戒し寺院に泊まる熱心な在家信徒である。以上のように、リーク・ロンは在家信者による在家信者のための仏教文書であり、仏教文書の書写や朗誦を、もっぱら在家の朗誦師チャレーが行うことがシャンの文書文化の特徴である。

3. 仏教文書文化のカテゴリー —タイ仏教の事例より

上述してきたリーク・ロンがシャンの有する仏教文書のなかで占める位置を理解するためには、シャンの仏教文書の全体像を把握しておく必要がある。しかし残念ながら、まだシャンの仏教文書の全体像をとらえる文学史や文献学からの研究がないため、本稿では次善の策として、隣接するタ

イの仏教文書のカテゴリーを参照する¹²。

①パーリ經典（律・經・論の三蔵）

パーリ語の律・經・論の三蔵を意味する。但し、タイも含めて東南アジアの仏教徒はブツダの教えが文字で書き記されたパーリ經典の存在は広く認識してはいるが、実際に仏教徒が日々接するのは、三蔵のうち特定の部分のテキストである。布薩日に僧侶たちによって朗誦されその内容が確認される律（パーティモッカ）や仏教儀礼の際に僧侶が朗誦する護誦經（プラ・パリット พระปริต）¹³、葬儀の際に僧侶によってとなえられるアピタム經（พระอภิธรรม）などが代表的なものである。しかもこれらのパーリ語のテキストは、それらを暗記し、内在化した僧の誦經という「声」の形で在家信徒の前に現前する。

②パーリ語仏教文献

インドやスリランカで成立したパーリ語の註釈文献や歴史書、仏教説話の文献群である。スリランカの仏教史書「島史」（ディーパヴァンサ คำศัพท์ปางค์）、「大史」（マハーヴァンサ คำศัพท์ทางค์）などがこの中に入る。近代仏教文献学ではパーリ三蔵經そのものとは区別されるが、東南アジアの仏教徒社会の仏教実践のレベルでは、そのような区別は明確ではなく、広い意味でのパーリ經典と考えられてきた。

③東南アジアで作られたパーリ語仏教文書

文献学的には、東南アジアで創作されたとされて区別されるが、実際には①、②とともにパーリ語で書かれた聖なる書物とみなされる。現在の北タイにあたるラーンナー王国では、歴史書チナ

カーラマリー（จินตามลีนภรณ์）、チャーマテーウィーウォン（จามเทวีวงศ์）などや註釈文献などが学僧によってパーリ語で多数著作されてきた。作者不明であるが地方民話を取り入れジャータカを模した形式をとる仏教説話パンヤーサ・チャードック（ปัญญาสาตก) もこれに該当する。⑤の地域語で書かれた朗誦用仏教文書はパンヤーサ・チャードックから数多くの題材をとっている。また、神通力を有する僧マーライ師の天界・地獄界めぐりを描いた「プラ・マーライ經」（พระมาลัยสูตร）も成立年代・成立地は明確ではないが、東南アジアにおいて作成されたパーリ語の仏教説話の一つであると考えられる [cf. Brereton 1995]。このパーリ語版プラ・マーライ經をもとに、地域語で書かれた朗誦用のタイ語版プラ・マーライ經の様々なヴァージョンが作成されている。

④地域語で書かれたパーリ語經典や教義の註釈文献

地方語（北タイ語、ラオ語、タイ語）で書かれたパーリ語經典の翻訳・註釈文献がある。これらは仏教知識に長けた僧侶によって書かれており、ラーンナーの仏教では、ニッサヤー（นิสสัย）やウォーハーン（โหวง）と呼ばれるジャンルの仏教文書がある。前者は、特定のパーリ語の經句を手掛かりに仏教教義の説明を行う文献で、僧侶が説法を行う前に参照する「参考書」として学習されている。後者は、説法の時に僧侶が読み上げ在家信者が拝聴する説法の原稿である。またタイ北部のスコータイ朝で作成された「スコータイ王の三界經」（トライプーム・プララン ไตรภูมิพระหลวง）¹⁴ はタイ語で仏教的世界観を記述した文書であり、タイ国最初の文学作品とされる。「三界經」の世界観はしばしば寺院壁画に描かれ、絵画を通した

教理解説の題材を多数提供している。これらの文書はパーリ語の仏教世界（上述の①、②、③）と地方語の仏教世界（後述の⑤）を架橋する文書であり、僧侶が仏教教理を学んだり、説法の参考にしたり、寺院壁画の題材などとなって、僧侶が在家信徒を教導・教化するための資料としての役割を果たしている [cf. McDaniel 2008b]。

⑤地域語で書かれた朗誦用仏教文書

地域語で書かれた仏教文書には④の Kategorie 以外に、韻文で書かれ、在家信徒のために朗誦される文書がある。タイ仏教においては、「マハーチャート説法会」(งานเทศน์มหาชาติ) で朗誦される「ウェートサンドーン・チャードック」(เวสสันดรชาดก 布施太子本生経) のタイ語韻文版「マハーチャート」が有名である。また、葬儀で朗誦されるプラ・マーライ経のタイ語版もこの朗誦用仏教文書に入る。これらはジャータカなど物語性を有するパーリ語経典・文書の内容をタイ語の韻文にしたものである。マハーチャートやプラ・マーライ経以外にも、パンヤーサ・チャードックや民間説話などから題材をとった朗誦用仏教文書が多数作成されている。このような仏教に関連する内容を持ち、特定の調子で朗誦される韻文詩は、中部タイではクローン・スアット (กลอนสวด 朗誦詩) と呼ばれている¹⁵。クローン・スアットは、それらが作成され、奉納され、朗誦されるのが仏教寺院であることから「寺院文学」(วรรณกรรมวัด) とも呼ばれる [Niti 1984: 21]。

以上、タイ国での仏教文書の諸カテゴリーの概要をみてきたが、シャンのリーク・ロンに対応するのは、地域語の韻文で書かれていること、仏教

儀礼で在家信徒のために朗誦されるということから、⑤の地域語で書かれた朗誦用仏教文書に当たる。上記の①、②、③に関しては、シャンの仏教徒はビルマ仏教の強い影響を受けており、ビルマ文字で表記されたパーリ語経典やパーリ語文書、つまりビルマ仏教と同じものを使用している¹⁶。④の Kategorie に関しては、ビルマ仏教にもパーリ語経典や教義の注解書ニッサヤーがあるが、シャンの僧侶がビルマ語版のニッサヤーを使用するのか、それともシャン語のニッサヤーというものを有しているのか現時点では不明である。また説法原稿であるウォーハーンは、僧侶が読み上げたものを在家信徒が拝聴するという点で、リーク・ロンと共通する。但し、シャンの僧侶が説法する際にウォーハーンのような説法原稿を使用するのか、もし使用するとしてそれが韻文で書かれているのか、さらに特定の調子をつけて朗誦するのか、など現時点では不明な点が多い。シャンの仏教文書における④の Kategorie の詳細については今後の研究課題としたい。次節では、中部タイの朗誦用仏教文書のクローン・スアットの特徴を紹介し、リーク・ロンとの比較を試みる。

4. 朗誦用仏教文書の比較

4. 1 クローン・スアット

クローン・スアットの特徴は、比較的平易で朗誦しやすい韻文形式であるカーブ (กาพย์) で書かれていることで、聴く者を楽しませながら仏法倫理を説くことがその目的である。もともとその内容は仏教の教説・教訓が中心で朗誦を拝聴することが積徳となると考えられていたが、クローン・スアットが人々に好まれて広まるにしたがって、

宗教性や道徳性に加え、娯楽性の高い民間説話などの内容が増えていったとされる。聴く者を楽しませる要素として、声の調子、説話の内容、韻文の技巧の3つがある [Trisin 2004: 2-3]。朗誦と拝聴というテキストの享受の形態から「耳で読む」文学ともいわれるように、仏教文書の朗誦は内容に加えて、朗誦者の声の調子・声の良さ、それに脚韻・中間韻・特定音節への声調指定などの韻文の技巧といった音声的要素によって聴衆を楽しませる。

タイの文学研究者であるトリーシンは、寺院で行われる特定の仏教儀礼の中で僧侶によって行われるマハーチャートの韻文朗誦と対比して、クローン・スアットの特徴は、特定の儀礼とは結びつかず、年中儀礼や祭日あるいは持戒日で人が集まるときにはいつでも、様々なタイトルの文書が朗誦されること、場所も寺院のみならず在家者の自宅で朗誦されること、さらに朗誦者は僧侶と在家者の両方であることであるとしている。そしてこの対比にしたがって、葬儀の際に葬家に安置された死者の棺の前で朗誦されるプラ・マーライ経はクローン・スアットの代表的なものであるとしている [Trisin 2004: 5]。

さらに、トリーシンは中部タイのクローン・スアットと同様に、地域語で書かれた韻文の仏教文書朗誦として、東北タイのアーン・ナンサー・ブーク (อ่านหนังสือ 経典本読み)、南タイのスアット・ナンサー・ブット (สวดหนังสือ 折り畳み本朗誦)、北タイのラオ・カーオ (เล่าคำ 韻文詩語り) あるいはカーオ・ソー (คำขอ 韻文詩歌) を挙げ、韻文の仏教文書朗誦がタイ系諸グループに広く見られることを指摘している [Trisin 2004: 9-20]。

4. 2 プラ・マーライ経朗誦とスアット・カルハット
クローン・スアットの代表として挙げられるプラ・マーライ経について興味深いのは、プラ・マーライ経朗誦の継承・発展の中での、在家者が朗誦する中部タイのスアット・カルハット (สวดกัณฑ์ 在家朗誦) の成立である。プラ・マーライ経朗誦は、元来は善業悪業の報いを在家信徒に教え諭す内容であり、結婚式と葬儀に朗誦されるものであったが、後に葬儀のみで朗誦されるようになった。人が亡くなってから葬儀が行われるまでの通夜で毎晩行われる僧侶のアピタム経の誦経が終わった後、明け方まで遺体のそばで夜を過ごす人たちのために、4名1組の僧侶によって朗誦されるものであったが、道徳的な教説ばかりでは拝聴者が飽きてしまうため、朗誦者はプラ・マーライ経の本筋に滑稽な話を挿入していくようになった。そして後年その傾向がさらに進み、登場人物が女性の時には女装をし、歌をうたい、下品な言葉を使い、4名の僧侶よるセリフの掛け合いなどがあり、聴衆を笑わせ楽しませる娯楽性・演劇性が前面に出るようになった [Trisin 2004: 7-9]。しかし、このような娯楽性の高いプラ・マーライ経朗誦は僧侶が行うにはふさわしくないということから、主に在家者の朗誦者が行うようになる。これが在家朗誦スアット・カルハットの始まりである。

ブレトンには、スアット・カルハットの誕生には、ラーマ1世期 (在位1782-1809年) のサンガが改革の影響が大きいとしている。新たにラタナコーシン朝を興したラーマ1世は、サンガの清浄性を求め、僧侶に相応しくない諸々の行いを禁止する法令を出した。その一環として、娯楽性の高いプラ・マーライ経の朗誦を僧侶が行うことも禁止し

た。それ以降徐々に、娯楽性の高いプラ・マーライ経朗誦は、朗誦に長けた元僧侶の在家朗誦師によるスアット・カルハットとして行われるようになったとしている [Brereton 1995: 131-133]。

世俗権力の介入により、娯楽性の高いプラ・マーライ経朗誦は在家者によって担われていくようになる。在家者が行うことで朗誦／上演に対する制限がなくなり、娯楽性への傾斜が一層進み、楽団が入り、本来のプラ・マーライ経とはかけ離れた内容の大衆娯楽・歌唱喜劇へと転化していく。しかしそれでも、スアット・カルハットは葬儀の通夜で朗誦／上演されるものであり、まったく宗教性を失っているわけではない。朗誦師は僧侶のアピタム経誦経と同様に4名1組で僧侶用の座台に上がり、座台の前にはアピタム経箱を置き、僧侶が誦経の際に持つ儀礼用の扇を手を持ち、朗誦の最初はパーリ語の三宝帰依句からはじまり、アピタム経やプラ・マーライ経の初めの部分を少し朗誦した後に、面白おかしい歌や踊りを始める。このようなスアット・カルハットが、現在のタイの大衆芸能リケーの源流の一つであるとされる [Nisa 2013]。

4. 3 クローン・スアットとリーク・ロン

「聴く者を楽しませながら、仏法倫理を説く」という目的からみても、また声の調子・内容・韻文の技巧といった3要素が重要である点からみても、中部タイのクローン・スアットとシャンのリーク・ロンには共通する部分が多い。但し、前節でみたタイ国内のどの地方においても、マハーチャートの朗誦とクローン・スアット系の朗誦の両方が行われていたのに対して、シャンの場合には「説法会」でのマハーチャートの朗誦より

も、様々な機会において多様なタイトルのリーク・ロンの朗誦を拝聴することが好まれる。筆者が調査を行っているタイ北部のメーホンソーンのシャン仏教徒のあいだでは、「マハーチャート説法会」は全く行われていない¹⁷。また葬儀の時にリーク・ロン朗誦は行われるが、朗誦されるのはプラ・マーライ経ではない。つまり、テキスト享受の形態は共通であるが、テキストの内容に共通性があまり見られないといえよう¹⁸。

朗誦者の属性（僧／俗）から見てみると、クローン・スアットに言及するタイの文学（史）研究では、クローン・スアットを朗誦する者には僧侶・在家者の両方いるが、もともとは僧侶が朗誦しており、後に在家者も朗誦するようになったとする。在家者の朗誦は二次的に派生したと考えられている。スアット・カルハットも、僧侶から在家者へというパターンを踏襲して誕生している。この点に関しては、リーク・ロンはクローン・スアットとは対照的である。リーク・ロンは第一に在家者チャレーが朗誦するもので、僧侶は朗誦する能力があっても、仏教儀礼において人々の前で朗誦することはめったにない¹⁹。

それでは、同じく在家によって朗誦されるスアット・カルハットとリーク・ロンの朗誦を比較してみるとどうであろうか。ラーマ5世期の世俗権力の介入により、プラ・マーライ経朗誦は宗教性を保持する僧侶の朗誦と娯楽性を追求するスアット・カルハットに分けられ、スアット・カルハットは娯楽性を極端に発展させていった。それに対して、リーク・ロンの朗誦は一定の娯楽性を保ちつつも、宗教性が保たれているため、その拝聴が積徳となると考えられている。この違いは、テキストへの忠実さの違いにあると考えられる。

スアット・カルハットは、声の調子・内容・韻文の技巧という韻文仏教文書朗誦の3要素すべてにおいて、テキストから逸脱していった。聴衆を楽しませるため、朗誦から歌唱への声の変化、楽団の演奏による音楽性の追加、テキストの内容を逸脱した面白可笑しい話の付加、形式美ともいえる韻文から即興的な口語体のセリフへの変更、これらの変化を経てプラ・マーライ経朗誦はスアット・カルハットへと至ったのである。

一方、リーク・ロンは宗教性と娯楽性の両方の性格を保持しつつ現在に至っている。リーク・ロンの朗誦で娯楽性を表現できるのは、朗誦者の声の調子・声の美しさと、テキストに書き込まれている韻文の技巧である。宗教性を保持しているテキストの内容を朗誦者が勝手に面白可笑しく変更することは考えられない。テキストが提示する定型の中で個人の有する朗誦の技量によって聴衆を魅了することが、チャレーの腕の見せ所である。

5. 仏教文書の在家朗誦

前節では、リーク・ロンの特徴を明らかにするために、タイの文学（史）研究、文化史研究から垣間見える仏教文書文化との比較を行ってきた。主に参照してきた文学（史）研究では、テキストの分析が中心となり、読者の社会的属性や、テキスト享受の形態についての情報は不足がちである。一方、実際の上座仏教徒の社会における仏教文書文化の内実を明らかにしてきたのは、伝統的文学知識の内容やその運用形態、出家者に対する寺院教育、また伝統的知識を有する在家者の活動などを研究してきた文化人類学者である。以下では、文化人類学者の民族誌の中で記述されたタ

イの在家朗誦の様態をいくつか紹介し、リーク・ロンの朗誦と比較検討を行う。

5. 1 タイ農村の民族誌記述にみられる在家朗誦

朗誦用仏教文書は、文学（史）研究では「寺院文学」とも呼ばれ、僧侶による文芸活動によって作成されてきたとされてきた。確かに民族誌においても、僧侶が朗誦し、在家が拝聴するマハーチャート朗誦やテキストを読み上げるタイプの説法が標準的な仏教文書朗誦のスタイルとして記述されてきた。しかし、これらの民族誌記述を読んでいくと、在家朗誦に言及した記述を見ることができる²⁰。

タンバイアによる1960年代半ばの東北タイの農村の民族誌の中に、僧侶の説法についての記述がある。調査村での僧侶の説法は、自由に仏教の教理を在家信徒に教え諭すのではなく、貝葉写本に書かれたテキストを朗誦するものであり、テキストを美しく読み上げるために僧侶は朗誦の練習に励まなければいけないとしている。そして、僧侶が説法の際に読み上げるテキストの中で、テート・ニターン (ທຳນິທານ 物語説法) というジャンルの文書について言及している。テート・ニターンはラオ語の説法であるが、經典文字であるタム文字で書かれており、その内容はa. 仏伝、b. ジャータカ、特にマハーチャート (ウエートサンドーン・チャードック)、c. 地域の民間説話の3種類に分かれる。そして機会に応じてテキストが選ばれ、仏教儀礼の中で僧侶がこれらの書物を読み上げて、その内容の説明を行うとしている [Tambiah 1968: 102-103]。

この特徴からみて、これらのテート・ニターンの中の「c. 地域の民間説話」が中部タイのクロー

ン・スアットに該当する。タンバイアはこれらのテート・ニターンは僧侶によって行われるとしながらも、「文字の読み書きができる村人たち自身が、ニターンの写本を所有しており、通夜において弔問者や訪問客を楽しませるためにそれらを読む」[Tambiah 1968: 104] としている。この記述から当時の東北タイの調査村では在家者による葬儀の通夜での仏教文書朗誦が行われていたことと、僧侶が朗誦するテート・ニターンと同じテキストを使っていたことが分かる。しかし残念ながら、在家者が葬儀で読むテート・ニターンの内容、文書を朗誦する者の属性は分からない。

次に、1950年代の半ばに北タイ・チェンマイ郊外の農村で調査を行った人類学者キングスヒルの記述である。彼は北タイで行われる僧侶の説法のスタイルについて言及し、テキストを読みあげるものと、即興的に話をしていくものの2つがあるとする。前者の方が一般的であり、多くの僧侶や見習い僧によって行われ、後者は限られた出家者のみが行えるとしている。読み上げる説法のテキストの代表的なものはマハーチャートである。「これらのランナーの説法は、歌をうたうように誦経するスタイルでいつも行われる」[Kingshill 1974: 153]。そして、調査村の人たちにとっては、その説法の内容が理解できるかどうかよりも、聖なる言葉に耳を傾ける敬虔な態度が積徳にとって重要であると考えていると指摘している。ここでの僧侶の説法テキストは、クローン・スアットと同じような韻文の仏教文書であると考えられる。また、キングスヒルは調査村では説法テキストが在家者によって朗誦されることもあるとして、次のように述べている [Kingshill 1974: 160]。

幾人かの村人は、僧侶や見習い僧として寺院にいた時に他の僧侶がもっている本から写した説教や冊子のコピーを持っており、家に知人・友人が集まる夜には、良い声をした人、普通は元僧侶や元見習い僧が、説法や本の一節を朗読する。ここでも強調されるのは、その内容ではなく、朗誦の仕方であるようだ²¹。

さらに出家経験のある在家の知識人が、朗誦用仏教文書ではないが、遺族から死者追悼の韻文詩の作成を依頼され、自ら葬儀において朗読するという慣習や、見習い僧が読み上げ説法の練習をする際に、儀礼に相応しいようにテキストを修正してやるなど、在家者の知識人が仏教文書の朗誦に積極的な関与していることも指摘している [Kingshill 1974: 153, 160-164]。

これらの記述はキングスヒルの調査時には、地域語で書かれた韻文の朗誦用仏教文書は、「僧侶が朗読し、在家信者が拝聴する」だけではなく、「在家者が朗読し、在家者が拝聴する」場合も、さらには「在家者が出家者に朗読を教える」場合もあったことを表している。

この点について興味深いのは、タイ人の民俗学者ポーラミンが調査したラーブリー県の「マハーチャート説法会」での朗誦である [Poramin 2012]。この調査村では説法会を陰暦12月白分9日～11日の期間で行う。他の「マハーチャート説法会」と同様、13段に分かれているマハーチャート(ウエートサンドーン・チャードック)の各段を一人の僧侶が担当し、この期間内にすべての段を通して朗読し、在家信者が拝聴するという儀礼である。この調査村の説法会が特徴的なのは、13段の内、最初の「トッサポーンの段」(ถัสน์ท้าวพร)を除く

12段の各段をその年に新しく得度した僧侶が担当し、朗誦の練習をして、村の人々にその成果をお披露目するのであるが、その新人僧にそれぞれ付いて教える朗誦の先生の大半が出家経験のある在家男性である。新人僧が朗誦する12段の内、在家男性が先生となっているのが11段、僧侶が先生となっているのが1段のみである [Poramin 2012: 24-30]。調査村のマハーチャート朗誦は、寺院内で継承され、僧侶が朗誦し、在家者が拝聴するものであるが、その朗誦の技術・知識は在家男性が主として担っていることがわかる。

5. 2 タイ農村の在家朗誦とリーク・ロン朗誦との比較

筆者はこれまでの研究でシャンの仏教文書文化においては、チャレーによるリーク・ロン朗誦が重要な実践であり、在家者が朗誦し、在家者が拝聴するという点が特徴的であるとしてきた [村上 2002; Murakami 2009, 2012]。そして、このような「在家者による在家者のため」の仏教文書朗誦は、シャンに特有のものではないかと考えていた。しかし本稿でこれまで見てきたように、タイ国内の文学（史）研究や人類学者による民族誌を精査すると、あまり強調はされていないが、仏教文書の在家者による朗誦の実践が過去にも現在にもあり、サンガのみに限定されない仏教文書知識や朗誦の技能の継承が明らかになった。これらのタイ国内のタイ系民族の事例は、仏教文書の朗誦は僧侶のみが行うのではなく、在家者も行う場合があり、この点においては僧俗の立場の違いが決定的な区別とはならないことが分かった。

但し、クローン・スアットは現在のタイ国内ではほとんど行われておらず、現在観察できる在家

の仏教文書朗誦への関与は、細々と行われている葬儀でのプラ・マーライ経朗誦やスアット・カルハット、上述のラーブリーの在家朗誦師によるマハーチャート朗誦の新人僧への教授など、非常に限定的である。タイ国内の韻文仏教文書朗誦は衰退の一途をたどっているように見える。一方シャンのリーク・ロン朗誦者は、高い文字知識を有するチャレーの減少などの困難はあるものの、現在においてもシャンの仏教儀礼で行われており、タイ国内の在家者の仏教文書朗誦とは対照的である。

一般的に、タイ国内におけるクローン・スアット、プラ・マーライ経、スアット・カルハットなどの韻文仏教文書の朗誦は、学校教育の普及における伝統的知識の断絶、さまざまな近代メディアの浸透によって、衰退していったとされる。この説明をシャンの事例の分析に援用すると、シャンでは学校教育の普及が進まず、経済発展・近代化が遅れたために近代メディアの浸透がまだ顕著でないために、韻文仏教文書の朗誦が残っており、将来的に近代化や経済開発が進めばタイ国内と同様に衰退すると考えることもできるであろう。しかし、タイ国内の在家朗誦とシャンのリーク・ロン朗誦の違いを、単に経済的・社会的環境の変化だけに求められるであろうか？

タイ国内の場合、20世紀初頭から始まる国家サンガの組織化と仏教の制度化の影響を考える必要がある。ラーマ5世期に僧侶が行っていた娯楽的プラ・マーライ経がスアット・カルハットへと転換していったこと、寺院教育を標準タイ語で書かれた教学書を使って行うこと、地域ごとの伝統的なサンガを再編し中央集権的なサンガ組織を形成したことなどを勘案すると、これらの変革は単に出家者組織の改編のみならず、寺院を基盤として

出家者・在家者の両方が継承してきた伝統的な文字知識のあり様にも大きな変化をもたらしたのではないかと筆者は考える。一方、シャンの場合、ミャンマー連邦共和国内の少数民族としての立場から自らの民族的独自性を確立する必要があり、20世紀半ばより、シャン文字改革とシャン語教育の近代化、シャン文字パーリ三蔵經典編纂などとならび、リーク・ロンをシャンの仏教文学として再評価する運動が行われてきた [村上 2002]。タイ国内とシャンの仏教文書文化の違いを生み出していったのは、このような韻文仏教文書の朗誦をめぐる政治的環境の違いが大きかったのではないだろうか。今後さらに詳細な検討が必要であると考える。

6. まとめにかえて

本稿ではシャンの朗誦用仏教文書であるリーク・ロンの特徴を明らかにするため、タイ国内のタイ系民族の仏教文書文化と比較検討を行った。タイ国内の文学（史）研究や人類学者による民族誌を精査すると、タイ仏教においても、仏教文書の在家者による朗誦の実践が過去にも現在にもあり、サンガのみに限定されない仏教文書知識や朗誦の技能の継承があることを明らかにした。ここでは、文字テキストを音声として享受する朗誦—拝聴の実践が僧侶から在家者への一方通行ではなく、在家者も在家者のために朗誦することがあること、さらに在家者から出家者へ文書を朗誦する技能が伝えられることがあることを指摘した。一時出家の慣行があり、出家と在家のあいだの人的還流が頻繁に行われる東南アジア大陸部の社会においては、「寺院文学」であっても、その実践的

知識は寺院内、出家者内にとどまらず、広く在家者にも開かれ、出家者—在家者の間を還流している。この点に関しては、シャンのリーク・ロン朗誦の知識・技能と共通する部分が多い。しかし、タイ国内のタイ系民族では僧侶と在家の両方の朗誦者がいるのに対して、シャンの場合にはもっぱら在家のみが朗誦するという違いはどのような要因からくるのであろうか。この点はさらに検討が必要である。

註

- 1 本研究は、科学研究費補助金・基盤研究（B）「声と文字をめぐる宗教実践の研究—東南アジアと隣接地域の比較」（15H03282）の研究成果の一部である。
- 2 文献学的には、パーリ三蔵經典、三蔵の直接の註釈書アッタカター、その註釈書ティーカー、さらにその註釈書アヌティーカーなどの文献、これらに加えて、ローカルな言語で書かれた註釈文献・仏教説話など、言語・内容によって詳細に分類されるが、仏教徒が仏教の教えが記述されていると尊崇する文書全体を仏教文書とする。
- 3 13世紀にタイ北部に成立し、15世紀から16世紀初頭に仏教文化の黄金期を迎えたラーンナーはその文化的・政治的影響力を近隣地域に及ぼし、ラオス北部、シャン州東部のチェントウン、中国雲南省の西双版纳（シップソーンパンナー）には現在もラーンナー系の經典文字であるタム文字を使用する仏教文化圏が形成されている [飯島 1998; Iijima 2009]。タム文字仏教文書は本稿の考察の対象としていない。
- 4 ビルマの仏教史の通説では、16世紀に上ビルマに進出したシャンは仏教を尊崇せず、寺院や仏塔の破壊を行ったとされ、そのような「異教徒」のシャンに仏教を布教したのがコンバウン朝の第3代王バインナウン（在位1551-1581）であったとする。しかしシャン人の研究者はすでに11世紀のパガン朝の時代からシャンは熱心な仏教徒であったと主張する [cf. Sai Kam Mong 2004; Sai Aung Tun 2009]。
- 5 伝統的な写本は、カジノキ科の樹木の樹皮から作った紙の折り畳み写本（パップ・サー พับပိ）に、墨によって文字が書かれたものである。東南アジアの伝

- 統的な写本は大きく分けて、ヤシ科の葉を加工した貝葉写本と紙を蛇腹状にした折り畳み写本があるが、シャンのパップ・サーは後者に当たる。シャンのパップ・サーの形状や製作方法については、Terwiel and Chaichuen [2003] が詳しい。
- 6 仏教文書とそれ以外の世俗の文書の違いは、朗読の時と場所によって明確に区別される。寺院での仏教儀礼や葬儀では仏教文書が朗読され、それ以外の世俗の文書の朗読はふさわしくないとされる。
 - 7 「施術護符用ノート」を使うのは、高い文字知識を有する施術者サラー (sara) である。施術者をめぐる仏教文書文化については、本稿では考察の対象としない。
 - 8 近年、印刷され製本されたリーク・ロンも作成されており、これらの印刷版リーク・ロンを書店や市場で購入し、奉納する行為もシャンの人々の間で広まっている。
 - 9 在家の朗読者のことをシャン州南部では総じて「チャレー」と呼ぶが、シャン州に隣接する中国雲南省徳宏地区のタイ族 (Chinese Shan と呼ばれる人々) は、「ホールー」と呼ぶ [小島 2014]。
 - 10 例外的に、仏教文書の朗読や筆写のみで生計を立てる者もいるが、少数である。
 - 11 但し、葬儀の通夜で行われるリーク・ロンの朗読は長時間にわたることもある。
 - 12 シャンのリーク・ロンの特徴を明らかにするためには、タイ系仏教徒との比較に加え、シャンに大きな文化的影響を与えているビルマの仏教文書との比較も必要となってくるが、今後の課題としたい。
 - 13 慣例では護呪経とされるが、「呪」という字を使うと非合理的な呪術的行為という意味合いが強調されるため、筆者は護誦経と表記する。
 - 14 1345年ごろ、スコータイ朝のリタイ王によって著作されたとされる [Reynolds & Reynold 1982: 5]。
 - 15 仏教の教説や教訓が含まれた物語という意味でニヤーイ・タム (ນິຍາຍທາມ 仏法物語) と呼ばれる [Trisin 2004: 2]。
 - 16 20世紀半ば以降、パーリ語を表記するためのシャン文字が考案され、シャン文字表記の三蔵経典がシャン人僧侶によって出版されてはいるが、広く使われているわけではない。
 - 17 同じシャン州内であっても、チェントウンを中心とするシャン州東部のタイ系民族タイ・クーンの仏教徒は、ランナー仏教の影響が強く、「マハーチャート説法会」を好む傾向がある。
 - 18 リーク・ロンのテキストの内容については、中部タイに加え、ランナー、ラオ、ビルマの仏教文書との比較検討が必要となるが、この点も今後の検討課題としたい。
 - 19 スアット・カルハット成立の経緯を見ると、リーク・ロン朗読も僧侶から在家朗読師へと転換した可能性は否定できないが、現時点ではほぼ在家朗読師による。リーク・ロンの朗読者の歴史の変遷の可能性については今後の課題としたい。
 - 20 但し、アユタヤ時代の「寺院文学」について論じたニティは、バンディット (บันฑิต) と呼ばれる寺院在住の在家知識人の存在を指摘し、「こららの人々の役割は、在家信徒に宗教的経典を朗読し聴かせることであった」 [Niti 1984: 21] と述べている。
 - 21 ジャータカに題材をとった僧侶の説法用テキストを在家者がコピーし、自宅で個人的に読むことは、同じく北タイ農村の宗教実践を研究したデイヴィスも指摘している [Davis 1984: 137-138]。

参考文献

- Berkwitz, Stephan C., Juliane Schober, and Claudia Brown 2009 "Introduction: Rethinking Buddhist Manuscript Cultures." In *Buddhist Manuscript Cultures: Knowledge, Ritual, and Art*. Edited by Stephan C. Berkwitz, Juliane Schober, and Claudia Brown, pp. 1-15. Oxford: Routledge.
- Brereton, Bonnie P. 1995 *Thai Tellings of Phra Malai: Texts and Rituals Concerning a Popular Buddhist Saint*, Tempe: Arizona State University.
- Davis, Richard B. 1984 *Muang Metaphysics: A Study of Northern Thai Myth and Ritual*, Bangkok: Pandora.
- 飯島明子 1998 「ランナーの歴史と文献に関するノート ―チェンマイの誕生をめぐって」 新谷忠彦 (編) 『黄金の四角地帯―シャン文化圏の歴史・言語・民族』慶友社, pp.104-146.
- Iijima, Akiko 2009 "Preliminary Notes on 'the Cultural Region of Tham Script Manuscripts'." In *Written Cultures in Mainland Southeast Asia*, Edited by Masao Kashinaga, *Senri Ethnological Studies* 74:15-32.

- Kingshill, Konrad 1974 *Ku Daeng-The Red Tomb: A Village Study in Northern Thailand, A.D. 1954-1974*, Third Edition, Bangkok: Suriyaban Publishers.
- 小島敬裕 2014 『国教と仏教実践—中国・ミャンマー境域における上座仏教徒社会の民族誌』京都大学学術出版会。
- Manas Chitakasem ed. 1995 *Thai Literary Traditions*, Bangkok: Chulalongkorn University Press and Institute of Thai Studies, Chulalongkorn University.
- McDaniel, Justin 2000 “Creative Engagement: Sujavanna Wua Luang and its Contribution to Buddhist Literature.” *Journal of the Siam Society* 88(1&2):156-177.
- 2008a “Manuscripts and Education in Northern Thailand and Laos (1569-1920).” *The Journal of the International Association of Buddhist Universities* 1: 109-119.
- 2008b *Gathering Leaves & Lifting Words: Histories of Buddhist Monastic Education in Laos and Thailand*, Seattle: University of Washington Press.
- 村上忠良 2002 「越境する在家知識人の活動—タイ国北部の国境地域のシャン文字知識の継承」片岡樹（編）『聖なるもののマッピング—宗教から見た地域像の再構築に向けて』CIAS Discussion Paper No.26, 京都大学地域研究統合情報センター, pp.36-42。
- Murakami, Tadayoshi 2009 “*Lik Long* (Great Manuscripts) and *Care*: the Role of Lay Intellectuals in Shan Buddhism.” In *Written Cultures in Mainland Southeast Asia*, Edited by Masao Kashinaga, *Senri Ethnological Studies* 74: 79-96.
- 2012 “Buddhism on the Border: Shan Buddhism and Transborder Migration in Northern Thailand.” *Southeast Asian Studies*, Kyoto University, 1(3):365-393.
- 村上忠良 2012 「越境する在家知識人の活動—タイ国北部の国境地域のシャン文字知識の継承」片岡樹（編）『聖なるもののマッピング—宗教から見た地域像の再構築に向けて』CIAS Discussion Paper No.26, 京都大学地域研究統合情報センター, pp.36-42。
- Nisa Malanont (นิตา เมลนนต์) 2013 “Suat Kaluehas: The Origin of Thai Comedians (वादककुहसुत:ต้นกำเนิดตลกไทย).” *Songklanakarin Journal of Social Science and Humanities* (วารสารสงขลานครินทร์ ฉบับสังคมศาสตร์และมนุษยศาสตร์) 19(3): 3-31.
- Niti Iaosiwong (นิตี เอื้อสวัสดิ์วงศ์) 1984 *Pen and Sail: Literature and History in Early Bangkok* (ปากไ่ก่และใบเรือ: รวมความเรียงว่าด้วยวรรณกรรมและประวัติศาสตร์ต้นรัตนโกสินทร์), Bangkok: Amarin Printing House.
- Poramin Jaruworn (ปรามินทร์ จารูวอร์) 2012 *Phra Bot: Dynamics of the Usages to Buddhist Arts Relating Vessantara Jataka in Nong Khao Community* (พระบฏ: พลวัตของการใช้งานพุทธศิลป์เรื่องเวสสันดรในชุมชนหนองขาว จังหวัดกาญจนบุรี), Bangkok: The Sirindhorn Thai Language Institute, Chulalongkorn University.
- Reynolds, Frank E. and Reynolds, Mani B. 1982. *Three Worlds according to King Ruang: A Thai Buddhist Cosmology*. Berkeley, California: Center for South and Southeast Asian Studies, University of Berkeley.
- Sai Aung Tun 2009 *History of the Shan State: From Its Origins to 1962*, Chiang Mai: Silkworm Books.
- Sai Kam Mong 2004 *The History and Development of the Shan Scripts*, Chiang Mai: Silkworm Books.
- Terwiel, Barend J. and Chaichuen Khamdaengyodthai 2003 *Shan Manuscripts Part 1*, Stuttgart: Franz Steiner.
- Trisin Bunkhacon (ตรีศีลป บุญขจร) 2004 *Literature of Klon Suat Style in Central Thailand: An Analytical Approach* (วรรณกรรมประเภทกลอนสวดของภาคกลาง: การศึกษาเชิงวิเคราะห์), Bangkok: Institute of Thai Studies, Chulalongkorn University.